

E-5 突発性難聴に対する高気圧酸素療法（第5報）

名古屋大学医学部耳鼻咽喉科

柳田則之、三宅 弘

名古屋大学医学部高気圧治療部

高橋英世、小西信一郎、菅原修二

西山博司、吉宮由美子、榊原欣作

名古屋大学医学部第1外科

川村光生、小林繁夫

突発性難聴の治療に関しては、その成因が如何なるかにより異なってくることは当然であるが、それが解明されていない現在、考えられ得る病態論をあてはめて、その最終病態が局所の循環障害にもとづく酸素不足とそれに結果する代謝障害であるという観点に立って高気圧酸素療法を施行し好成績が得られていることを本学会に報告して来たが、今回は高気圧酸素治療を施行した症例と従来の治療法のうち代表的と考えられる星状神経節遮断を施行した症例について比較した。

1. 対象

昭和47年3月より50年12月までの間に高気圧酸素治療（OHP）を施行した131例と、同期間に星状神経節遮断（SB）を施行した97例について比較検討した。尚これらは何れも発症後4週間以内に治療を開始したものに限定した。

OHP治療法は2ATA、60分を1回の治療とし、連日施行、14-20回を1クールとした、一方SB治療法は1回につき1%キシロカイン5CCを週3回施行、それに点滴静注（低分子デキストラン、ATP、ステロイド、Vitamin）を併用した症例も半数以上ある。

尚、両治療群ともに全症例にVitamin B群、ATP、血管拡張剤の内服を併用している

2. 成績

発症から初診までの期間を7日以内、8-14日、15-28日の3段階に、聴力損失区分を0-35dB、40-85dB、90dB以上の3段階に分けた。500Hz、1000Hz、4000Hz各々の周波数についての成績は表1に示す如くである。

この表において「初診時」の枠内の数字はそれぞれの症例数を示し「固定時」の下の枠内の数字は固定時聴力損失のdBに相当した症例数を示している。例えば1000HzにおいてOHP群をみると、初診時までの期間が7日以内で聴力損失が40-85dBのものが39例あり、このうち固定時の聴力が0-35dBに回復したものが32例、40-85dBのものが7例であったことを示している。このようにして同一の条件、即ち発症後の日数と難聴の程度が同一の条件に入る区分においてOHP群とSB群との聴力回復を比較検定した。

この表からみられるように、500Hz、1000Hz、4000Hzともに殆んどすべての区

分でOHP群の方がSB群よりも聴力回復の成績の良いものも多く、検定した結果でも500Hzでは、8~14病日の40-85dBの区分のものに、1000Hzでは7病日以内の90dB以上の区分と、8~14病日の40-85dBの区分のものに又4000Hzでは15~28病日の90dB以上の区分のものに、それぞれ有意差(P<0.05)がみられた(OHPの区分の所に☆印を附す)

500

	~7日		8~14日		15~28日	
	初診時	固定時	初診時	固定時	初診時	固定時
0 dB	1	1	5	5	4	4
35 dB	41	30	21	8	8	0
40 dB		11		13		8
85 dB	10	2	6	1	1	0
90 dB		4		4		0
		4		1		1

SB

	~7日		8~14日		15~28日	
	初診時	固定時	初診時	固定時	初診時	固定時
0 dB	5	5	0	0	4	4
35 dB	41	34	☆27	19	9	2
40 dB		7	8	7		
85 dB	14	6	19	3	12	0
90 dB		5		12		9
		3		4		3

OHP

☆☆ P<0.01 ☆ P<0.05 ▼P<0.10

1000

	~7日		8~14日		15~28日	
	初診時	固定時	初診時	固定時	初診時	固定時
0 dB	3	3	1	1	2	2
35 dB	38	28	21	6	8	1
40 dB		10		15		7
85 dB	11	0	10	1	5	0
90 dB		5		3		0
		6		4		3

SB

	~7日		8~14日		15~28日	
	初診時	固定時	初診時	固定時	初診時	固定時
0 dB	1	1	0	0	2	2
35 dB	39	32	☆31	18	14	5
40 dB		7	13	9		
85 dB	☆20	3	15	0	9	0
90 dB		14		11		6
		3		4		3

OHP

☆☆ P<0.01 ☆ P<0.05 ▼P<0.10

4000

	～7日		8～14日		15～28日	
	初診時	固定時	初診時	固定時	初診時	固定時
0 35 40	3	3	4	4	0	0
}	4	1	19	4	6	0
	35	16		15		6
85 90	0	0	0	0	0	0
}	8	5	9	5	7	2
	35	3		4		5

	～7日		8～14日		15～28日	
	初診時	固定時	初診時	固定時	初診時	固定時
0 35 40	3	3	1	1	1	1
}	36	26	30	9	13	0
	35	10		21		13
85 90	0	0	1	1	0	0
}	21	12	15	8	11	9
	35	9		6		2

☆☆ P<0.01 ☆ P<0.05 ▼ P<0.10

3. 考按並びに結語

私共は突発性難聴に対する従来の代表的な治療と考えられている星状神経節遮断の成績をControlとして高気圧酸素治療の効果を検定して次の如き結果を得た。

① 500 Hz , 1000 Hz , 4000 Hz と8病日以後の区分で有意差がみられることはどのような聴力低下の型を示すものにおいてもOHPの方がより長期間聴力回復の可能性のあることを示している。

② 特に日常会話に重要である1000 Hzにおいて、7病日以内の聴力低下が著明な90 dB以上の区分のものに有意差がみられたことは、高度難聴者では早期にOHP治療が必要なことを示しているものと考ええる。

以上の成績にもとずいて、私共は治療のシステムを次の如く行っている。

即ち、発症後1週間位までは、高気圧酸素治療以外の治療法で聴力回復の状態を観察しそれで回復しそうな症例はそのまま続行する。

回復のみられない場合は即刻OHP療法に切り替える。但し聴力低下が高度難聴に限っては、より早期よりOHP治療を積極的に行うべきであると考えている。